

ひまわりからの メッセージ

30号

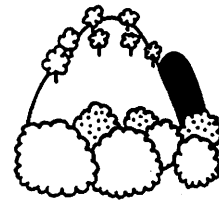
2013.9.10

濃園城
西濃障がい支援センター
ひまわり

発行人：中野たみ子

人の話を

聞く態度



八月末の日曜日、私は東京にいました。

私の所属する短歌の同人誌の百周年記念パーティーがあったのです。歌壇を代表する多くの方がごあいさつされ、各々に祝意を表わして下さいだったので、残念ながら話がよく聞きとれません。後方に座った会員の人たちは、入会して日も浅く、百周年記念というよりも、仲間うちの会話の方がきくと楽しく、たのびよう、テーブルを囲んで話はずんでいるようでした。私の師は長い間、会員の指導的立場にあり、礼節を重んじる人でしたので、その光景を「賢い」なったり、どんなに嘆かれたことかと思いが痛みました。

師は二年前に世を去られ、この日を迎えられることはなかったのです。

会場の一角に座りながら、今の子どもたちに、聞く態度が育っていないのも無理からぬことだと思いました。

今の子どもたちの祖父母の年齢にあたる人たちが、この状態なのです。子どもにとって見本とすべき大人の姿が失われていっていることでしょう。

学校の先生が「授業参観に来校したお母さんたちの話が大きくて授業中に困りました。」とおっしゃられたことも思い出し、先日の私の体験とも重ねて、話を聞くという姿勢が全体的にうすれてきているのかとも思ったのです。

もちろん、子ども達の中には、聞かなくてはと思つてはいても、できない子達もいるのです。困っている子もいるのです。けれど、私たち大人が相手のことを聞かずに自分勝手に話して行く行動を続けていくことは、子どもたちの見本として、余りにも情ないと思いませんか？

人の話について口をきかずに、自分自身を反省しつ、そんなことを考えていました。

診断名の

告知について考える



この夏、あちこちで話をさせていただく機会があり
小中学校の先生や保育者、そしてお母さん方など聞
いて下さる方も実に多くの立場の方に会いました。

講演にしても、この「ひまわり」からのメッセージにし
ても、私の一方的な発信なので、受け取って下さる人
によって感じ方が違うだろうと思います。私自身
も、書きはじめた時は、お母さんの顔も思い浮かんで
いるのに、下原稿もなしに書いていくうちに、いつ
のまにか、保育士さんだったり、教員の方に話して
いるような内容になってしまったりするのです。

お会いした方々から「読んでいますのよ」と声をか
けられると、有難いという感謝の思いと共に、申し
訳ないという気持ちもわいてきます。推敲を重ねた文
章ではありませんので、その点、お許し下さい。

さて、今回は、診断名の告知ということについて考え
てみたいと思います。

私の孫は、もうじき四歳になります。難病をもって
るので、元氣なのに病院へ点滴に行っています。視神
経も弱いのので眼鏡をかけていますし、風邪をひいたりす
ると生命に危険があると言われ、幼稚園もあきらめま
した。そんな彼は、「大病したかうね」と、大病がどん
なものかも知らず、明るく言っています。ぬいぐるみ相手
のゴッコ遊びは、入院ゴッコが圧倒的に多く、自分の
体験を投影させています。いつ、彼が自分の病気を知
ることになるのかわかりませんが、「何故、元氣なのに点
滴なの？」と疑問をぶつけてくることも多くなってきました。

皆さんのお子さんも、色々な形で自分が他の子とち
がうのではないかと感じているのではないだろうか？
幼児期から、皆と同じことができない、できない自分が
許せなくて、最初から「いやだ」と拒否していったよ
うな自閉症スペクトラムのお子さんは、他の子とちが
う自分を漠然と感じとっているのかもしれない。

二〇一〇年にアスペルガー、高機能自閉症の十二歳から十八歳の一三八名に調査した結果、九十名がすでに診断名を知っていたとのことです。そして、そのうち二十名は、子どもが自分で認知したとのことでした。そして大人による告知の四割は親が担当していました。子どもが知るようになるのは、八歳から増加し、十二歳で知った症例が最取も多かったということでした。

よこはま発達クリニックの先生が出された資料には、困難の把握・整理と、困難の改善（本人への技術指導、環境調整、薬物療法など通常の治療教育、支援も重ね、マヤリようはある）、長所でもある」という実感を育んだ後に診断告知に進むべきだと書かれています。そして告知後も具体的に支援を続けることの大切さを説かれています。

私が出会った子の中に「ぼくは自閉症なんだから、皆がぼくに合わせてくれるのは当然」と言う子もいましたし、「どうせ、治らへんし、ぼくは病氣やっつてお母さんには言っとるし、何やっても無駄なんや」と言った子

もいました。この子たちは、告知のされ方がきつと問題だったのですね。告知をすることが多いお母さんたちが、子どもの特性もどの様に考えているのかということが大きく影響されていくように思います。

一つには、脳のタイプとしての説明の仕方があります。脳は、考えたり、覚えたり、見たり、聞いたり感じたり筋肉に動けと指令を出したり、そういうことは全て脳のはたらくですが、脳には色々なタイプがあります。右利きか左利きかということも脳のタイプ分けの一つだし、自閉症か、自閉症じゃないかというのも脳のタイプ分けの一つという説明です。

もう一つは、生活上の困難を改善していく強みでもあるという考え方です。

へ自閉症の脳タイプの人の長所

- ・ 目標を達成したい気持ち強い。
- ・ ルールはちゃんと守りたい。
- ・ まじめ、努力家
- ・ 好きなことには、すごく集中できる。
- ・ 好きなことはよく覚える。

へ 苦手とするところへ

- ・ 急に予定が変わると、すごく心配・イライラする。
- ・ 好きなことはなかなかやめられない。
- ・ みんなで一緒に何かをするのは苦手。
- ・ 思っていることがうまく伝えられなくて困ることがよくある。誤解されてしまう。



長所と苦手はセットです。

- ・ 自分の好きなことに熱中できるからこそ、好きなこととを途中でやめられない。
- ・ この特徴をなくす必要はありません。
- ・ だって長所だから……
- ・ でも、好きなことを区切るわけがもてれば、あなたも比目も便利です。

つまり、自分の特性を知ること、長所もあるし苦手もあるけれど、それをうまく使うことで改善していったり、長所を生かしたりしていくことができるのだと考え

て前に進んでいけることが大切なのです。

- ・ 不意に何かがおきたり、予測できないことがおきたると不安で固まってしまうけれど、見通しをたてて納得ができればがんばられる。
- ・ 耳から入ってくることは、ただら長いと何を言われていのか分からないけれど、短く端的に言ってもらったことは、すぐ覚えられる。
- ・ パターンの記憶は得意。
- ・ 好きなことを教材やごほうびに使ってもらえば、意欲的にがんばれる。

こうしたことや、例えば大きい音は苦手とか、後から不意にさわられるにりするのには困るとか、自分の困り感を人に伝えて、なるべく余分なトラブルを引きおこさないようにすることもできるでしょう。自分のことがわかってトラブルを回避することも、大事な生きる力と言えましょう。

私たちには分からない本人の困り感も多いと思いますが、よこはまフREENICKの



先生は、次のようなアドバイスもしております。

「他の人の脳タイプに気づいた時、その子が自分の先生から教えてもらうまでは、自閉症のことは言わないでいてあげて下さい。」

学校にも、クラブにも、自閉症の脳タイプの子はたくさんいるはずですよ。あなたは、きっとそれに気づくはずですよ。でも、その子はまだ自分の脳タイプを知らないかもしれません。

でも、あなたが言うのと誤解するかもしれません。自分のことをあなたにのみ言われるのはイヤだと思いませんか。それなら、言わないでおきましょう。」

そして、

「自閉症だということはとても大切な情報ですよ。だから大切なことをわかってくれる人にだけ話しましょう」とも言っておられます。

まだまだ理解の進んでいない現状を再認識させられた思いがして、ドキッとしたことばでした。



今回はよきはま発達クリニックの先生のお話を引用させていただいたのですが、自閉症スペクトラムのお子さんだけでなく、ADHDのお子さんも、常に自分だけが注意を受ける状況におかれることが多いために、他児とのちがいを実感させられることがあるのではないかと思います。

あるADHDの子が「やったらあかんと思ってるんやけど、その瞬間、叩いてしまっるとんや。」とどうしていいのか分からん」と言ったことがあります。「でも、そのことに気づいたってことは、すごいことやと思うよ。」と言うと、はにかんだように笑ってくれました。「ぐっとけんこつを握ってイチって教える間だけ、がまんできるといいね」と、対策も練ったのですが、本人自身が本当はとてつもなく苦しんでいるのだということも、私たちは知っておかなくてはいけないとつくづく思います。衝動的に行動をおこした後で後悔している子どもの苦しさを。そこから、一步一步、ほんのわずかながらんばりを認め、ほめていくことの大切さを忘れたくないなあと思っております。

学習障害の子どもたちも、先生にほめられたい、お母さんに認めてもらいたいと思っております。でも、自分に向けられることは「努力が足りない」という評価なのです。どうして、その学習に「つまずくん」だろうか？、何故漢字が書けないのだろうか？、何故計算ができないのだろうか？、そう、いう見方をしてみることが大切なのではないでしょうか？

どこを読んでいるのか、ぐしゃぐしゃになってしまっている子、形の認識がうまくできない子、数の基本的な部分でつまずいている子……それぞれに手だてを見つけてあげないと、子どもたちは、どんどん勉強がういになっていくでしょう。

授業についていけないのに座っていなければならぬ苦しみ、つまずきがどんどん広がっていく悲しみ、苛立ちをこぼす、行動で表わしてみても、キッと子どもたちの心が満たされることはないのだろうか……と、思っています。

自分は勉強は余りできないけれど、手先は器用なので、お母さんがいつもほめてくれる、ほくは仕事かすま

だから、お手伝いをいっぱいする、お母さんは「あなたの良い所は心がやさしい」というところよ」と言ってくれる等々、どこかで認められること、ほめられること、その子の居場所があることが、とても大事だと思っております。

どんな子だって、この世に生を受けた大切な命なのです。その子の長所を私たちが探し出し、認め、ついでにあげたいですよ。子どもたちが「自分らしく」を知り、将来の自分をしっかりと見つめていくことが出来るように、今から心しておきたいことです。



・十二月十四日(土) 午前十時～十二時まで

「視覚機能とビジョントレーニングについて」

谷口光之先生の講演を予定しております。

場所はソフトピアセンター10F 大会議室です。

申込はセンター 中野まで (FAX: 78-4845)

・十月例会は「思春期の課題」十月八日です。